

Complex Leech lattice と Sporadic Suzuki group

東大 理学部 吉荒 聡

( Satoshi Yoshizawa )

§ 1 単純群の極大部分群分類問題

有限群のうちで essential な存在である有限単純群に関する様々な疑問——どの位存在するか, どんな部分群構造を持つか——等は有限群論の重要な推進力のひとつであった。有限単純群の分類が完成された今日, その部分群構造の決定は残された重要課題のひとつであろう。すなわち, 与えられた有限単純群を含む部分群, それらの交わり等, 等々を調べる必要がある。前者は次の問題(\*)に帰着される。

(\*) 与えられた有限単純群  $G$  に対し,  $G$  の極大部分群の共役類の完全代表系を求める。

(\*) はごく自然な問題ゆえ, 群論創始以来数多くの研究がなされている。

$L_2(8)$  : Dickson [8]

$L_3(8), U_3(8)$  ; Bloom [1], Hartley [13], Mitchell [7]

$Sz(8)$  : Suzuki [21]

$Sp_4(8)$  ;  $q=odd$  Mitchell [18],  $q=even$  Muene [19]

$G_2(4)$  ; Butler [3], Peterson-Tchakerian [20], Wilson [24]

$G_2(8)$  ;  $q=even$  Cooperstein [6],

${}^2F_4(2)'$  : Tchakerian [22]

$L_4(8)$  :  $q=even$  Muene [19]

Mathieu 群  $M_{11}, M_{12}, M_{22}, M_{23}, M_{24}$

Chang-Choi と Conway [5]

HS : Magloveras [16]

$J_1$  : Janke [14]

$J_2, J_3$  : Finkelstein - Rudvalis [12], [11]

$M^c, \cdot 3$  : Finkelstein [10]

$He$  : Butler [2]

筆者は sporadic simple group  $Suz$  に対する問題(\*) を考へ次の結論を得た。 [26]

Theorem  $Suz$  の 極大部分群 の 共役類分割の完全代表系は 次のリストに含まれる。

$2^{1+6} \cdot U_4(2), 2^{2+8} \rtimes (A_5 \times \Sigma_3), 2^{4+6} \rtimes Z_3 \cdot A_6,$

$Z_3 \cdot U_4(3) \cdot Z_2, 3^{2+4} \rtimes Z_2(A_4 \times E_4) \cdot Z_2, 3^5 \rtimes M_{11},$

$(2^2 \times L_3(4)) \cdot \Sigma_3, (3^2 \times A_6) \cdot Q_8$

$(A_5 \times A_6) \cdot Z_2, M_{12} \cdot Z_2, J_2 \cdot Z_2, U_5(2), G_2(4),$

\*  $L_3(3)$ ,  $Z_2$  (2-class), \*  $L_2(25)$ , \*  $A_7$

このうち \* EPのもの以外は確かに存在する。

Notation 上記において,  $p^n$  は order  $p^n$  の elementary abelian group,  $Z_m$  は order  $m$  の cyclic group,  $p^{a+b}$  は  $P' \cong p^a$ ,  $P/P' \cong p^b$  なる special group,  $2^{+6}$  は negative type の extra special 2-group (order  $2^7$ ) とおろす,  $\Sigma_n$ ,  $A_n$  は  $n$  次 対称, 交代群,  $Q_8$  は order 8 の quaternion group.

注意: Wilson は Computer を用いて上記の3つの \* EP の subgroup の存在を示した。[24]

筆者の知る所では, 次の単純群についても右記の人々が問題(\*) と考察中 ないしは 解決した由である。

$Suz$	Wilson [24], Yoshizawa [26]	決定
•1	Curtis [7] + Wilson [25]	決定
•2	Wilson	(多分決定)
$G_2(8)$	$\delta = \text{odd}$ Ed Migliore	(多分)決定
${}^2F_4(2^{2m+1})$	John Sarlio	
$L_4$	Andrew Waldman	
$O'N$	Yoshizawa	Maximal local は決定

なお, Fischer の群  $F_{22}$ ,  $F_{23}$  については特別な形の subgroup の  $\gamma$  2つが存在する。(Enright [9])

以下、本稿では Complex Leech lattice 及び その自己同型群の factor group としての sporadic Suzuki group の定義 (§2) より始め、その基本的性質を幾つか紹介する。 (§3) §3 の内容は大体においては新しいものではないが、ここに述べる形で書かれたことは無いので (Complex Leech lattice を扱った論文としては Lindsey [15] が唯一のものであろう。) "Complex Leech lattice  $\Lambda$ " の意味を込めて、まとめしておく。(証明等詳細には [27] 見よ。)

§4 では §3 で準備した Complex Leech lattice の解析を通じて得られる 顕著な 3-local group の幾つかを記述する。

なお、§3 で見るように Complex Leech lattice の係数制限は Real Leech lattice として良(知られたものであるが (例えば Conway [5]) Complex Leech lattice 自身がある  $\mathbb{Q}(i, j, k)^6$  の  $\mathbb{Z}[i, j, k, \frac{1}{2}(1+i+j+k)]$ -module の係数制限となっている。(ここで  $\mathbb{Q}(i, j, k)$  は  $\mathbb{Q}$  上の 4元数環。) この module  $\hat{\Lambda}$  (Quaternionic Leech lattice とよぶ) に対応する群は  $G_2(4)$  であり、 $\hat{\Lambda}$  を通じて  $G_2(4)$  の諸性質を解明しると共に、 $G_2(4) \cong S_3$  となるから、 $S_3$  自身の subgroup の構造決定にも深くかかわってくる。この辺の事情の詳しい解説は Wilson [23] または [28] を参照されたい。

## § 2 基本概念の定義

Notation

$\Omega := \mathbb{F}_{11}$  上の projective line  $= \{\infty, 0, 1, \dots, 10\}$

$Q := \mathbb{F}_{11}$  の平方元  $= \{x^2 \mid x \in \mathbb{F}_{11}\}$

$N := \Omega - Q$

$i \in \mathbb{F}_{11} = \{0, \dots, 10\}$  に対して  $N_i := \{n-2 \mid n \in N\}$

$Q_i := \{q-2 \mid q \in Q\}$ ;  $N_\infty := \Omega$  とおく。

$\mathbb{F}_3$  成分の 14 行 12 列 vector 全体のなす空間を  $\mathbb{F}_3^{12}$  と書き, natural basis を  $\Omega$  に index 付け

$\{e_\infty, e_0, \dots, e_{10}\}$  とする。  $\mathbb{F}_3^{12} \ni X = \sum_{i=\infty}^{10} x_i e_i \in$

$(x_i)_{i=\infty}^{10}$  とも書き,  $\{i \in \Omega \mid x_i \neq 0\}$  を  $X$  の support,

$\{i \in \Omega \mid x_i = 1\}$  を  $X$  の positive support, support の 濃度 を

Weight とよぶ。 また  $X \subseteq \Omega$  に対して  $\sum_{x \in X} e_x$

のことと,  $e_X$  と略記する。

(定義 1.)  $C_\infty := e_\Omega = (1, \dots, 1)$

$C_i := e_{N_i} - e_{Q_i} = \underbrace{(1^e)}_{N_i}, \underbrace{(-1^e)}_{Q_i} \quad (i \in \mathbb{F}_{11})$

とおくとき, これらの張る  $\mathbb{F}_3^{12}$  の subspace

$\mathcal{C} := \langle C_\infty, C_0, \dots, C_{10} \rangle$  を ternary Golay code とよび,

$\{ \sigma : \{e_\infty, \dots, e_{10}\} \text{ に 関 する 単 項 行 列 } \mid \mathcal{C}^\sigma = \mathcal{C} \}$

を  $\mathcal{C}$  の 自己同型群 と呼び  $\text{Aut } \mathcal{C}$  と記す。

次に、複素数体  $\mathbb{C}$  における 1 の原始 3 乗根  $\omega = -1 + \sqrt{-3}/2$  とし、 $\theta = \sqrt{-3}$  とおく。  $\mathbb{Z}$  に  $\omega$  を添加した ring  $\mathbb{Z}[\omega] = \{ \frac{1}{2}(a + b\theta) \mid a, b \in \mathbb{Z}, a \equiv b \pmod{2} \}$  を  $R$  とおく。

$\theta R$  は  $R$  の ideal であり  $R/\theta R \cong \mathbb{F}_3$ , この代表系として  $\{0, \pm 1\}$  がとれる。

今、3 元体  $\mathbb{F}_3 \cong \mathbb{Z}/3\mathbb{Z}$  を代表系  $\{0, \pm 1\}$  と同一視して  $\mathbb{Z}$  の subset と見なし、 $\mathbb{F}_3^{12} \subseteq \mathbb{Z}^{12}$  (整数成分の 1 行 12 列  $N \times 12$  の全体)  $\subseteq R^{12}$  ( $R$  成分の 1 行 12 列  $N \times 12$  の全体) を  $R$ -module とみる。この同一視のもとで、

(定義 2.) 次の  $R^{12}$  の subset を Complex Leech lattice とよび  $\mathcal{L}$  とあらわす。

$$\left\{ \begin{array}{l} \mathbb{O} + \theta\mathbb{C} + 3\mathbb{X} \\ \mathbb{I} + \theta\mathbb{C} + 3\mathbb{Y} \\ -\mathbb{I} + \theta\mathbb{C} + 3\mathbb{Z} \end{array} \middle| \begin{array}{l} \mathbb{X} = (x_i), \mathbb{Y} = (y_i), \mathbb{Z} = (z_i) \in R^{12} \\ \sum_{i=1}^{12} x_i \equiv 0, \sum_{i=1}^{12} y_i \equiv 1, \sum_{i=1}^{12} z_i \equiv -1 \pmod{\theta} \\ \mathbb{C} \in \mathbb{C} \end{array} \right\}$$

$$\text{と } \mathbb{I} = (1, \dots, 1)$$

また  $\{ \sigma : \mathbb{Q}(\omega)$  成分の 12 次ユニタリ 行列  $\mid \mathcal{L}^\sigma = \mathcal{L} \}$  を  $\mathcal{L}$  の自己同型群 とよび、これを  $\text{Aut } \mathcal{L} = \tilde{G}$  と書く。

$\mathcal{L}$  は  $R^{12}$  の lattice ; 有限生成  $R$ -module である。

$\mathbb{Q}(\omega)\mathcal{L} = \mathbb{Q}(\omega)^{12}$  ; が示される。また order 6 のユニタリ

行列  $-\omega I \in \tilde{G} = \text{Aut } \mathcal{L}$  は明らかであるか、factor group

$\tilde{G}/\langle -\omega I \rangle =: G$  は simple group であることが示される。

$G = \text{Aut}/\Lambda / \langle -\omega I \rangle$  と Sporadic Suzuki group と呼ぶ。

以下,  $G$  の基本的性質の幾つかと, その為に必要な ternary Golay code  $\mathcal{C}$ , complex Leech lattice  $\Lambda$  なるものを  $\text{Aut } \mathcal{C}$ ,  $\text{Aut } \Lambda$  の幾つかの性質と証明なしに述べる。

(証明等詳しくは [27] と参照)

### §3 諸性質

(1) ternary Golay code  $\mathcal{C}$  と,  $M_{11}$  の 12 点置換表現.

ternary Golay code  $\mathcal{C}$  は次の  $3^6 = 729$  個のベクトルから成る。

Weight	#	positive support	個数
0	①	$\emptyset$	1
6	① $\pm C_i + C_\infty = \pm(1^6 0^6)$	$N_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$	$11 \times 2$
	② $\pm C_i - C_\infty = \pm(1^6 0^6)$	$Q_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$	$11 \times 2$
	③ $\pm C_i \pm C_j = \begin{matrix} \text{ca. etc} \\ (1^3, -1^3, 0^6) \end{matrix}$	$\Omega$ の任意の 3 点 $a, b, c$	$\binom{12}{3}$
9	① $\pm C_i \pm C_j + C_\infty = \begin{matrix} \text{ca. etc} \\ (-1^3, 0^3, 1^6) \end{matrix}$	$\Omega$ の任意の 3 点 $a, b, c$	$\binom{12}{3}$
	② $\mathcal{D}$ の negative.		$\binom{12}{3}$
12	① $\pm C_i = \pm(1^6, -1^6)$	$N_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$	$11 \times 2$
	② $C_\infty$ , ③ $-C_\infty$	$\Omega$	$1 \times 2$

$\mathcal{C}$  の weight  $n$  のベクトル全体を  $\mathcal{C}_n$  と書く。  $\text{Aut } \mathcal{C}$  の元は

単項行列ゆえ,  $\Gamma$  の weight を変えぬ。従って  $\text{Aut } \mathcal{C}$  は  $\mathcal{C}_0, \mathcal{C}_1, \mathcal{C}_2$  上に作用するが, これらはすべて transitive となる。

特に  $\text{Aut } \mathcal{C}$  は 24 変集合  $\mathcal{C}_{12} = \{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$  上に transitive に作用し, 従ってその符号を無視して得られる 12 個の pair のなす  $\mathcal{C} := \{\pm \mathcal{C}_0 \mid i \in \Omega\}$  上にも transitive に作用する。

一方, 単項行列のなす群として  $\text{Aut } \mathcal{C}$  は 24 変集合  $\{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$  上, 従って 12 個の pair  $E := \{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$  上に (transitive に) 作用する。

$E$  および  $\mathcal{C}$  への作用の核は  $\langle -I \rangle$  であり,  $M := \text{Aut } \mathcal{C} / \langle -I \rangle$  とおけば  $(M, E)$  は単項行列が  $\Omega$  上にひきおとす自然な置換群であり,  $(M_{12}, \text{natural な } 12 \text{ 変})$  と置換群として同型である事が示される。(  $M_{12}$  は 12 次 Mathieu 群 )

もうひとつの 12 変集合  $\mathcal{C}$  上の置換表現  $(M, \mathcal{C})$  は, 上の  $M \cong M_{12}$  の自然表現とは同値にならない。実際,  $(M, \mathcal{C})$  の 1 変  $\pm \mathcal{C}_0$  への stabilizer は,  $\text{Aut } \mathcal{C}$  の中の置換行列全体のなす群  $D$  と同型で,  $E$  上可移となる事が示される。

この  $\text{Aut } \mathcal{C}$  の permutation part  $D$  は, 抽象群としては,  $(M_{12}, E)$  の 1 変の stabilizer  $M_{11}$  (11 次 Mathieu 群) と同型となる事が示されるので,  $(D, \mathcal{C})$  は  $M_{11}$  の 12 変置換表現を与える。

$D$  の  $\mathcal{C}$  への作用により, 次の表  $\mathcal{C}_0$  の ①, ②, ③;  $\mathcal{C}_1$  の ①, ②;



$C_{12}$  の  $\mathbb{D}$ ,  $\mathbb{C}\alpha$ ,  $-\mathbb{C}\alpha$  は  $\gamma$  の  $\mathbb{P}$ -orbit となる。

(2) Complex Leech lattice  $\mathcal{L}$ ;  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  および cross.

$X \in \mathcal{L}$  に対し,  $g(X) = \frac{2}{9} \sum_{i=1}^{10} |x_i|^2$  ( $X = (x_i)_{i=1}^{10}$ ;  $|x_i|^2 = x_i \bar{x}_i$ ;  $\bar{x}_i$  は  $x_i$  の複素共役) とおいた二次形式  $g$  を定義すれば,  $g(X)$  は even integer で,  $g(X) = 2$  とみたす  $X \in \mathcal{L}$  は存在しない。すなわち,  $\mathbb{R}$ -module  $\mathcal{L}$  を  $\mathbb{Z}$ -module とみずして得られる  $\mathbb{Q}^{24}$  の lattice  $\mathcal{L}/\mathbb{Z}$  は  $g$  より導かれる二次形式  $g'$  に対し, even lattice かつ  $g'(X) = 2$  なる  $X \in \mathcal{L}/\mathbb{Z}$  を持たぬが 更に  $\mathcal{L}/\mathbb{Z}$  は unimodular (i.e.  $g'$  に associate する双二次形式  $e_{g'}$  と書くと  $\mathcal{L}/\mathbb{Z} = \{X \in \mathbb{Q}^{24} \mid e_{g'}(X, Y) \in \mathbb{Z} (\forall Y \in \mathcal{L}/\mathbb{Z})\}$ ) である事もわかる。従って, Conway [4] により  $\mathcal{L}/\mathbb{Z} \cong$  Real Leech lattice となる。これは  $\mathcal{L}$  を complex Leech lattice と呼ぶ事の正当化である。

$\mathcal{L}_n := \{X \in \mathcal{L} \mid g(X) = 2n\}$  ( $n=0, 1, 2, \dots$ ) とおく。  
 $\mathcal{L}_0 = \{0\}$ , 上の注意から  $\mathcal{L}_1 = \emptyset$ . 恒等計算により,  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  の vector の個数と形が求められる。

$$|\mathcal{L}_2| = 196,560, \quad |\mathcal{L}_3| = 16,773,120.$$

(定義 3.)  $\mathbb{R}$ -module  $\mathcal{L}$  の submodule  $\theta\mathcal{L} = \{\theta X \mid X \in \mathcal{L}\}$  による factor module  $\bar{\mathcal{L}} = \mathcal{L}/\theta\mathcal{L} = \{X + \theta\mathcal{L} \mid X \in \mathcal{L}\}$  を  $\mathcal{L}$  の mod  $\theta$  の reduction とよぶ。  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  の natural projection  $p = \mathcal{L} \rightarrow \bar{\mathcal{L}}$  による image を  $\bar{\mathcal{L}}_2, \bar{\mathcal{L}}_3$  と書く。

一般に,  $X \in \mathcal{L}$  に対して,  $p(X) = p(\omega X) = p(\bar{\omega} X)$  及び  $X \neq 0$  ならば  $p(X) \neq p(-X)$  である事に注意する。

次の重要な lemma が示される。

lemma.  $\bar{\mathcal{L}} = \{0\} + \bar{\mathcal{L}}_2 + \bar{\mathcal{L}}_3$  と分解される。

また,  $p$  は  $\mathcal{L}_2$  上 3 対 1,  $\mathcal{L}_3$  上 3-12 対 1 の map.

$\bar{X} \in \bar{\mathcal{L}}_2$  ( $X \in \mathcal{L}_2$ ) に対し  $p^{-1}(\bar{X}) = \langle \omega \rangle X = \{X, \omega X, \bar{\omega} X\}$ .

$\bar{X} \in \bar{\mathcal{L}}_3$  ( $X \in \mathcal{L}_3$ ) に対し,  $X = X_1$  と含む  $\mathcal{L}_3$  の 12 個の vector  $\{X_1, X_2, \dots, X_{12}\}$  で,  $p^{-1}(\bar{X}) = \{\langle \omega \rangle X_1, \langle \omega \rangle X_2, \dots, \langle \omega \rangle X_{12}\}$  とみえるものが unique に存在する。また  $\bar{X}$  に対応する双一次形式  $h$  に対し,  $X_i, X_j$  ( $1 \leq i \neq j \leq 12$ ) は直交する。

例えば,  $\forall i \in \Omega$  に対し  $\mathcal{S}_0 = (\overset{c}{3}\overset{c}{0}, 0'')$  とおけば

$\mathcal{S}_0 = 0 + \theta \cdot 0 + 3(\overset{c}{0}, 0'')$   $\in \mathcal{L}$  であり,  $h(\mathcal{S}_i, \mathcal{S}_j) = 0$  ( $i \neq j$ )。また,

$$\mathcal{S}_i - \mathcal{S}_j = \theta(\overset{c}{3}, \overset{c}{-3}, 0'')$$

$$(\overset{c}{3}, \overset{c}{-3}, 0'') = 0 + \theta \cdot 0 + 3(\overset{c}{1}, \overset{c}{-1}, 0'') \in \mathcal{L} \text{ 也}$$

$$\mathcal{S}_i - \mathcal{S}_j \in \theta \mathcal{L}. \quad \text{i.e. } p(\mathcal{S}_i) = p(\mathcal{S}_j).$$

従って, lemma から  $p^{-1}(\bar{\mathcal{S}}_{10}) = \{\langle \omega \rangle \mathcal{S}_i, \langle \omega \rangle \mathcal{S}_j, \dots, \langle \omega \rangle \mathcal{S}_{10}\}$

この  $\{\mathcal{S}_i, \mathcal{S}_j, \dots, \mathcal{S}_{10}\}$  は  $\mathcal{L}$  における直交座標軸の集合ともいふべき自然な対象である。そこで,

(定義 4.)  $\mathcal{L}_3$  の 12 個のベクトル  $X_1, \dots, X_{12}$  が

$$(1) \quad h(X_i, X_j) = 0 \quad (1 \leq i \neq j \leq 12)$$

$$(2) \quad X_i - X_j \in \theta \mathcal{L} \quad (1 \leq i, j \leq 12)$$

とみたととき, 2個の rank 1 の  $R$ -submodules のある unordered set  $\{R_{X_1}, R_{X_2}, \dots, R_{X_{12}}\}$  を cross とよび, 各  $R_{X_i}$  を axis と呼ぶ。

Lemma から, 任意の  $X \in \mathcal{L}_3$  に対し  $X$  を含む cross は unique に存在する。例えば先の  $\mathcal{S}_\infty = (\mathbb{R}^3, 0)$  を含む unique cross は  $\{R_{\mathcal{S}_\infty}, R_{\mathcal{S}_0}, \dots, R_{\mathcal{S}_{10}}\}$  である。この cross を Standard cross とよび,  $\mathcal{S}$  とおこう。

$\mathcal{L}$  の cross の全体を  $\mathcal{J}$  と書くと,  $\mathcal{L}_3 \ni p(X_1), -p(X_1) \mapsto \{R_{X_1}, \dots, R_{X_{12}}\}$  ( $X_1$  を含む unique cross)  $\in \mathcal{J}$  により,  $|\mathcal{J}| = |\mathcal{L}_3|/2 = 29 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13$  である。

(3) Monomial subgroup, 行列  $\Sigma$ ,  $Q$  の order と simplicity.

以後  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  のかわりに, その符号を無視した pair である集合  $\{\pm \bar{X} \mid \bar{X} \in \mathcal{L}_2\}$  等と考へ, これも同じく  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  と書く。Aut $\mathcal{L}$  の元はユニタリ行列ゆえ,  $\bar{X}$  を保つから  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  に作用する。0 $\mathcal{L}$  も不変にするから, 本来の意味での  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ , 従つて, その符号を無視した  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  上にも作用する。この核は  $\langle -\omega I \rangle$  であり,  $Q = \tilde{Q}/\langle -\omega I \rangle$  は  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  上 faithful に作用。

$\mathcal{L}_3$  の 1 変  $\{\pm p(\mathcal{S}_\infty)\}$  をとれば,  $Q$  におけるこの変の stabilizer は, Aut $\mathcal{L}$  における standard cross  $\mathcal{S}$  の stabilizer  $M$  の image  $\bar{M} (\subseteq Q)$  である。  $M$  をよ  $\bar{M} = M/\langle -\omega I \rangle$  を monomial subgroup とよぶ。

$$M = \left\{ \sigma \in \text{Aut } \Lambda \mid \begin{array}{l} \forall i \in \Omega \text{ に対し, } \exists j \in \Omega \text{ とし } \\ (R \mathcal{S}_i)^\sigma = R \mathcal{S}_j \end{array} \right\}$$

である。Aut  $\Lambda$  は  $\mathcal{S}$  を保つから、 $\mathbb{Z}[\omega] = R$  の unit group  $\langle -1 \rangle \cong \mathbb{Z}_2 \subset U$  と  $\mathcal{S}$  (とき、 $\mathcal{S}_i^\sigma \in R \mathcal{S}_j \cap \Lambda_3 = U \mathcal{S}_j$ 。

よって、 $M$  は  $U$  成分の単項行列となる。

$\Lambda$  の定義から、 $\mathcal{S}$  の各 axis と  $\sigma$  の fix する  $M$  の subgroup  $D_0$  は、 $D_0 = \langle -I \rangle \times D$ 、ここで  $D$ -unit 群 とい  $D \cong \mathbb{C}$  (ternary Golay code) とい  $\mathbb{C}$  の構造を持つ事がおかる。

$\mathbb{C} \ni \mathbb{C}$  に対し、行列  $d(\mathbb{C}) \in D$  と、次の  $d(\mathbb{C}) \in (2, 2)$

$$d(\mathbb{C}) = \omega^{\mathbb{C}} = \begin{cases} 1 & \text{if } \mathbb{C} = 0 \\ \omega & \mathbb{C} = 1 \\ \bar{\omega} & \mathbb{C} = -1 \end{cases}$$

成分とする対角行列として定義すれば、 $\mathbb{C} \mapsto d(\mathbb{C})$  が上の同型  $D \cong \mathbb{C}$  を与える。

また Aut  $\Lambda$  の元は  $\Lambda$  上への  $\omega \in R$  の作用 (これは  $D$  の元  $\omega I = (\omega, -\omega)$  従って上の対応を通じて  $(1, -1) = \mathbb{C}_0$  なる  $\mathbb{C}$  のべきと対応) と可換ゆえ、Aut  $\mathbb{C}$  における  $\mathbb{C}_0$  の stabilizer  $P \cong M_{11}$  (Aut  $\mathbb{C}$  の permutation part) に対応する置換群 (これを同じく  $P$  であらわす) が  $M \subseteq \text{Aut } \Lambda$  中にあるおかる。

実は、 $M = \langle -I \rangle \times (D_0 \times P)$  である。 $\Lambda_2, \Lambda_3$  の  $M$ -orbit 分解を慎重に計算すると次の表の如くである。

$\Lambda_2$	代表元 $X=(x_i)$	$\{ x_{\infty} ^2, \dots,  x_{10} ^2\}$	orbitの濃度
	(1) $(\underbrace{0^6}_{\Lambda_N}, 0^6)$	$\{3^6, 0^6\}$	$22 \cdot 3^5 \cdot 2$
	(2) $(\underbrace{0^3}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T4}}; 0^6)$	$\{3^6, 0^6\}$	$110 \cdot 3^5 \cdot 2$
	(3) $(\underbrace{3^5}_{\Lambda_N}, \underbrace{-3}_{\Lambda_N}, 0^{10})$	$\{9^2, 0^{10}\}$	$3^2 \cdot 11 \cdot 12$
	(4) $(\underbrace{-2}_{\Lambda_N}, \underbrace{-2}_{\Lambda_N}, 1^{10})$	$\{4^2, 1^{10}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot (\frac{12}{2})$
	(5) $(\underbrace{-2+\theta}_{\Lambda_N}, \underbrace{\bar{\omega}^5}_{\Lambda_N}; 1^6)$	$\{7, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$
	(6) $(\underbrace{-2-\theta}_{\Lambda_N}, \underbrace{\omega^5}_{\Lambda_N}; 1^6)$	$\{7, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$
$\Lambda_3$	表中: $T_1 = \{8, 6, 7\}$ $T_4 = \{0, 4, 3\}$	$T_2 = \{8, 10, 2\}$ , $T_3 = \{1, 9, 5\}$	
	(1) $(\underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta^6}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{0^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 5 \cdot 11$
	(2) $(\underbrace{\theta}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta\omega}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta\bar{\omega}}_{\Lambda_{T1}}; \underbrace{(-\theta)^6}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{0^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^4 \cdot 3^7 \cdot 5 \cdot 11$
	(3) $(\underbrace{\omega\theta}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta}_{\Lambda_{T1}}; \underbrace{-\omega\theta}_{\Lambda_{T2}}, \underbrace{-\theta}_{\Lambda_{T3}}, \underbrace{-\theta}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^4 \cdot 3^6 \cdot 5 \cdot 11$
	(4) $(\underbrace{\bar{\omega}}_{\Lambda_N}, \underbrace{\theta^5}_{\Lambda_N}; \underbrace{3}_{\Lambda_N}, 0^5)$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^3 \cdot 3^3 \cdot 11$
	(5) $(\underbrace{\bar{\omega}}_{\Lambda_N}, \underbrace{\theta^5}_{\Lambda_N}; \underbrace{-3}_{\Lambda_N}, 0^5)$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^3 \cdot 3^3 \cdot 11$
	(6) $(\underbrace{\bar{\omega}}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta^2}_{\Lambda_{T1}}; \underbrace{3}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{\theta^5}_{\Lambda_{T4}}; \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^4 \cdot 3^3 \cdot 5 \cdot 11$
	(7) $(\underbrace{3^3}_{\Lambda_{T1}}, 0^9)$	$\{9^3, 0^9\}$	$2 \cdot 3^3 \cdot (\frac{12}{3})$
	(8) $(\underbrace{\theta^6}_{\Lambda_N}; \underbrace{-2\bar{\omega}\theta}_{\Lambda_N}, 0^5)$	$\{12, 3^5, 0^6\}$	$2 \cdot 3^5 \cdot 22 \cdot 6$
	(9) $(\underbrace{\theta^3}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T4}}; \underbrace{-2\bar{\omega}\theta}_{\Lambda_{T4}}, 0^5)$	$\{12, 3^5, 0^6\}$	$2 \cdot 3^5 \cdot 110 \cdot 6$
	(10) $(\underbrace{3^5}_{\Lambda_N}, 0^{11})$	$\{27, 0^{11}\}$	$12 \cdot 6$
	(11) $(\underbrace{1}_{\Lambda_N}, \underbrace{(-2)^5}_{\Lambda_N}, 0^6)$	$\{4^5, 1^7\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 132$
	(12) $(\underbrace{1}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{(-2)^2}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{(-2)^3}_{\Lambda_{T4}}, 1^3)$	$\{4^5, 1^7\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 6 \cdot 110$

代表元 $X = (X_0)$	$\{ X_{01} ^2, \dots,  X_{10} ^2\}$	orbitの濃度
(13) $(\underbrace{-2+0}_{L_{T_1}}, \underbrace{\bar{\omega}^2}_{L_{T_2}}, \underbrace{(-2\bar{\omega})^3}_{L_{T_2}}, 16)$	$\{7, 4^3, 18\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(14) $(\underbrace{-2+0}_{L_{T_1}}, \bar{\omega}^2; 16; \underbrace{(-2\bar{\omega})^3}_{L_{T_4}})$	$\{7, 4^3, 18\}$	$2^2 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(15) $(\underbrace{-2-0}_{L_{T_1}}, \omega^2, \underbrace{(-2\omega)^3}_{L_{T_2}}, 16)$	$\{7, 4^3, 18\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(16) $(\underbrace{-2-0}_{L_{T_1}}, \omega^2; 16; \underbrace{(-2\omega)^3}_{L_{T_4}})$	$\{7, 4^3, 18\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(17) $(\underbrace{(-2+0)^2}_{L_N}, \underbrace{\bar{\omega}^4}_{L_N}, \underbrace{-2}_{L_N}, 15)$	$\{7^2, 4, 19\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 660$
(18) $(\underbrace{(-2+0)^2}_{L_N}, \omega^4; \underbrace{-2}_{L_N}, 15)$	$\{7^2, 4, 19\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 660$
(19) $(\underbrace{-2+0}_{L_{T_1}}, \bar{\omega}^2; \underbrace{-2}_{L_{T_1}}, 15; \underbrace{-2-0}_{L_{T_4}}, \omega^3)$	$\{7^2, 4, 19\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 110$
(20) $(\underbrace{1+20}_{L_N}, \omega^5; \underbrace{-2}_{L_N}, 15)$	$\{13, 4, 11\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 11$
(21) $(\underbrace{1-20}_{L_N}, \bar{\omega}^5; \underbrace{-2}_{L_N}, 15)$	$\{13, 4, 11\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 11$
(22) $(\frac{0}{4}, 11)$	$\{16, 11\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$

更に,

$$U(v, j, k) := \frac{1}{\theta} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & \omega & \bar{\omega} \\ 1 & \bar{\omega} & \omega \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ 0 \\ c \end{pmatrix} \quad \text{とおき, 行列の直和}$$

$$\xi := U(0, 6, 7) \oplus \overline{U(8, 10, 2)} \oplus \overline{U(1, 9, 5)} \oplus U(0, 4, 3)$$

$\xi$  は  $12$  次元  $\mathbb{C}$  の行列であるが,  $\mathcal{L} := \text{span} \xi$  の check される。すなわち,  $\xi \in \text{Aut } \mathcal{L} = \bar{\mathcal{L}}$ 。

上の  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  の  $M$ -orbit の代表元等と  $\xi$  を動かしてみることにより,  $\langle \xi, M \rangle$  は  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  上それぞれ transitive であることが示される。特に,  $G = \bar{\mathcal{L}} / \langle -\omega I \rangle$  は,  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  上 transitive であり, 前に注意した如く,  $\mathcal{L}_3$  の点  $\{\pm p(\bar{\omega}^2)\}$  の  $G$  をおぼす

stabilizer は  $\overline{M} = D_0 / \langle \omega I \rangle \times P \cong 3^5 \times M_{11}$  ( $3^5$  は order  $3^5$  の elementary abelian 3-group を表す。以後も使う。) であり,

$|\overline{L}_3| = |\mathcal{I}| = 2^9 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13$  かつ,  $G$  の order は,

$$|G| = |\overline{L}_3| \cdot |\overline{M}| = (2^9 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13) \cdot 3^5 \times 11 \cdot 10 \cdot 9 \cdot 8 = 2^{13} \cdot 3^7 \cdot 5^2 \cdot 7 \cdot 11 \cdot 13$$

と定まる。(この  $\overline{L}_3$  は符号を無視した新たな  $\overline{L}_3$  である。)

更に,  $\text{Aut } \mathcal{L}$  における  $X = \left( \begin{smallmatrix} 6 & 2 \\ 3 & -3 \end{smallmatrix}, 0^0 \right) \in \mathcal{L}_2$  の stabilizer が,  $D_1 = \{d(C) \mid C \text{ は } 6, 7 \text{ の support を含む } C \text{ の元}\}$ ,

$P_{6,7} = \{ \sigma \in P \mid \sigma^6 = 6, \sigma^7 = 7 \}$  等を含む事から,  $G$  における

$X$  の stabilizer  $G_X$  の  $\overline{L}_2$  ( $196560/6 = |\overline{L}_2|$ ) への作用における orbit が求られ, その size は 1, 891, 1980, 2816, 6336, 20736. ( $X \in \mathcal{L}_2$  に対する通常の内積  $X \cdot Y$  の値が

$\langle \omega \rangle 18, \langle \omega \rangle 9, \langle \omega \rangle 6\theta, \langle \omega \rangle 3\theta, 0$  の 0 を除く各々の値に対する  $Y \in \mathcal{L}_2$

の全体に  $G_X$  は transitive.  $X \cdot Y = 0$  なる  $Y \in \mathcal{L}_2$  は 2つの  $G_X$ -orbit に

分かれる。) この値から,  $(G, \overline{L}_2)$  が primitive であることが

わかる。(従って,  $G_X$  は  $G$  の maximal group である!)

また, この事実と  $\text{Aut } \mathcal{L}$  の元の固有値に対する簡単な注意により, あとは標準的な群論で  $G$  の simplicity が示される。

注意: 上の  $X \in \mathcal{L}_2$  の stabilizer  $G_X \cong U_5(2)$  である事は

$G$  の maximal local subgroup の分類が終了した段階でわかる。多分, もっと explicit に同型を確認できるであろう。

#### § 4 Some 3-local in $G$

この § では前 § の準備がけから見つかる Maximal 3-local group の候補 (実際に maximal group をなす) を記述する。

前 § で見た通り, 対応  $C \mapsto d(C)$  を通じて ternary Golay Code  $C$  と  $\text{Aut} L$  の subgroup  $D$  は  $\text{Aut} C$  の permutation part  $P$  の作用も込め同型であった。  $C$  の  $P$ -orbit と  $C$  の  $\bar{C}$  の表から  $\bar{D} = D/\langle \omega I \rangle \subseteq G$  は  $P$  の作用で 2 個の orbits に分解する。代表元は  $d(C_i) = \omega_i$  と  $d(C_i + C_j) = \omega_i \omega_j$  の image である。  $|G|$  より,  $\bar{D} \cdot P$  は  $G$  の 3-Sylow group と含み  $\bar{D}$  の外側の元は  $\bar{M} = \bar{D} \cdot P$  で 2 つの共役類に分解し, 前 § の元  $\bar{C}$  により  $\omega_i \omega_j$  とある  $\bar{M} - \bar{D}$  の元は fuse する。  $\text{mod} \langle \omega \rangle$  での行列の trace を比べればこうして得られた 3 つの  $\langle \bar{C}, \bar{M} \rangle$ -class は fuse し去ぬ。 すなわち,  $G$  の order 3 の元は 3 つの共役類に分かれる。  $\omega_i, \omega_i \omega_j$  は含み共役類  $C_A(3A), C_A(3B)$ ,  $C_A(3C)$  と書 (時, 次が示せる)。

Lemma ([26] Prop. 1.5)  $G$  の 3-local group  $L$  に対して 次のいずれかが成り立つ。  $\underbrace{\hspace{10em}}_{\text{maximal}}$

$$(1) L = N_G(A) \quad \text{or} \quad A = \langle A \cap C_A(3A) \rangle (\neq 1)$$

$$(2) L = N_G(A) \quad \text{or} \quad A^\# \subseteq C_A(3C)$$

以下 (1) の形の 3-local について述べる。  $A \subseteq \bar{D} \cdot P$  としてよいから先の考察より  $A \subseteq \bar{D}$  とある。  $P$  の作用を考えるこ



とあり  $\bar{\omega}_0 \in A$  としてよい。また  $|A| \geq 3^2$  ならば  $\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle \subseteq A$  としてよい。

$D \supseteq X$  に対して,  $X$  の axis 毎に fix する cross の全体を  $\Phi(X)$  と書く。例えば  $\Phi(D) = \{S\}$  であり, 前より,  $S \in$  axis 毎に fix する  $\text{Aut } \mathcal{L} = \bar{\mathcal{L}}$  の subgroup は  $D \times \langle -I \rangle$  である。

簡単な計算より,  $\Phi(\langle \omega_a, \omega_0, \omega_1 \rangle) = \{S, D_1, D_2, D_3\}$  を示せる。  
 $\geq 2$  であり,  $S$  は standard cross, かつ  $D_1, D_2, D_3$  は次の cross である。

$$T_1 = \{a, 6, 7\}, T_2 = \{8, 10, 25\}, T_3 = \{1, 9, 5\}, T_4 = \{0, 4, 35\}$$

とすると,

$$D_1 = \left\{ \begin{array}{l} R(\overset{\overline{T_0}}{\bar{3}}, \bar{3}, \bar{3}, 0^?) \\ R(\bar{3}, \bar{3}\omega, \bar{3}\bar{\omega}, 0^?) \\ R(\bar{3}, \bar{3}\bar{\omega}, \bar{3}\omega, 0^?) \end{array} \middle| \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$$D_2 = \left\{ \begin{array}{l} R(\overset{\overline{T_0}}{\bar{3}}, \bar{3}, \bar{3}\bar{\omega}, 0^?) \\ R(\bar{3}, \bar{3}\omega, \bar{3}, 0^?) \\ R(\bar{3}\omega, \bar{3}, \bar{3}, 0^?) \end{array} \middle| \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$$D_3 = \left\{ \begin{array}{l} R(\overset{\overline{T_0}}{\bar{3}}, \bar{3}, \bar{3}\bar{\omega}, 0^?) \\ R(\bar{3}, \bar{3}\bar{\omega}, \bar{3}, 0^?) \\ R(\bar{3}\bar{\omega}, \bar{3}, \bar{3}, 0^?) \end{array} \middle| \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$\geq 7$ ,  $\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle \not\subseteq A \subseteq D$  とすると,  $\exists \omega_i \in A$  ( $0 \neq 0, 1$ ) であり,  $\Phi(A) \subseteq \Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle) = \{S, D_1, D_2, D_3\}$  は明らかだが  $\omega_i$  は  $D_1, D_2, D_3 \in$  axis 毎には fix (しない)。

よって  $\Phi(A) = \{S\}$  である。  $N_{\text{Aut } L}(A)$  は明らかに  $\Phi(A)$  に作用するから  $S$  を stabilize し、従って  $N_{\text{Aut } L}(A) \subseteq M$ .  $Q = \text{Aut } L / \langle -\omega_a \rangle$  を考えれば  $N_Q(A) \subseteq \bar{M}$  である。

従って、(1) の形の maximal 3-local は  $N_Q(\langle \bar{\omega}_0 \rangle)$ ,  $N_Q(\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle)$  または  $N_Q(\bar{D}) = \bar{M}$  のいずれかに共役でなければならぬ。

$N_Q(\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle)$  の構造は、  $\Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle) = (S, D_1, D_2, D_3)$

への作用の核 (すなわち  $S$  を fix するから  $M$  に  $\lambda$  子) は  $M$  中では  $\lambda$  と見ること、及び 4 変数  $\Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle)$  上に  $A_4$  を  $\lambda$  子おこさる事により定められ、  $\mathbb{Z}^{2+4} \rtimes \mathbb{Z}_2(A_4 \times E_4)$ .  $\mathbb{Z}_2$  と同型群となる。

$N_Q(\langle \bar{\omega}_0 \rangle)$  の構造は次の様に求めらる。  $\omega_0 = (\bar{\omega}_0^6 \bar{\omega}_0^7)$  の固有値  $\omega$  に対する固有空間と  $L$  の共通部分である rank 6 の sublattice  $\Gamma = \{X \in L \mid X^{\omega_0} = \omega X\}$ , 更に  $\Gamma$  の mod  $\theta$  の reduction  $\bar{\Gamma} = \Gamma / \theta \Gamma = \{X + \theta \Gamma \mid X \in \Gamma\}$  を考える。  $\bar{\Gamma}$  は  $\mathbb{F}_3$  上 6 次元の space であるが  $\mathbb{Z}$  に  $L$  の二次形式  $\delta$  の  $\Gamma$  への制限の induce される二次形式  $\bar{\delta} : \bar{\delta}(X) = \frac{1}{2} \delta(X) \pmod{\theta}$  ( $\delta(X)$  は even integer である。) を入る。この二次形式  $\bar{\delta}$  は non-degenerate 及び negative type である事を示さる。  $C_{\text{Aut } L}(\omega_0)$  は  $\bar{\Gamma}$  に作用し (ユニタリ行列ゆえ) 従って  $\bar{\delta}$  を保つから、作用の核に到る大部分は  $O^-(6, 3)$  の subgroup, 実はその交換子となる事から。核は  $\langle \omega_0, \omega_a \rangle$  であることばかり、さしから  $C_Q(\bar{\omega}_0) \cong \mathbb{Z}_3 \cdot \text{P}\Omega^-(6, 3)$  である。 ( $-I$  は  $O^-(6, 3)$  の spin-1 行列である。) また  $P$  は  $\omega_0$  を invariant

すゝ元があるから,  $C_G(\bar{\omega}_0) \cong Z_3 \cdot PQ(6,3) \cdot Z_2 \cong Z_3 \cdot U_4(3) \cdot Z_2$   
 (  $\downarrow$  (知らぬ大同型  $PQ(6,3) \cong U_4(3)$  ) )

### References

- [1] Bloom, D. M., The subgroups of  $PSL_3(8)$ , for odd  $q$ , Trans. Amer. Math. Soc., 127 (1967) 150-178.
- [2] Butler, G., The maximal subgroups of the sporadic simple group of Held, J. Algebra 69 (1981) 67-81.
- [3] Butler, G., in [6]
- [4] Conway, J. H., A characterization of Leech's lattice, Inventiones Math. 7 (1969) 137-142.
- [5] Conway, J. H., Three lectures on exceptional groups, "Finite simple groups", Academic Press, London, 1971. chap. III, 215-247.
- [6] Cooperstein, B., Maximal subgroups of  $G_2(2^n)$ , J. Algebra, 70 (1981) 23-36.
- [7] Curtis, R. T., On subgroups of  $\cdot O$ , I Lattice stabilizers, II Local structure, J. Algebra 27 (1973), J. Algebra 63 (1980) 413-434.
- [8] Dickson, L. E., Linear Groups, Dover, New York, 1958.
- [9] Enright, G. M., Subgroups generated by transpositions in  $F_{22}$  and  $F_{23}$ , Comm. in Algebra, 6 (8), 823-837 (1978).

- [10] Finkelstein, L., The maximal subgroups of Conway's group  $C_3$  and McLaughlin's group, *J. Algebra* 25 (1973) 58-90.
- [11] Finkelstein, L., and Rudvalis, A., Maximal subgroups of Janko's simple groups of order 50, 232, 960, *J. Algebra* 30 (1974), 122-143.
- [12] Finkelstein, L., and Rudvalis, A., Maximal subgroups of the Hall-Janko-Wales group, *J. Algebra* 24 (1973), 486-493.
- [13] Hentley, R.W., Determination of ternary collineation group whose coefficients lie in  $GF(2^n)$ . *Ann. of Math.* 27 (1925) 140-158.
- [14] Janko, Z.A., A new finite simple group with abelian 2-Sylow subgroups and its characterization, *J. Algebra* 3 (1966) 147-186.
- [15] Lindsey, J.H., A correlation between  $PSU_4(3)$ , the Suzuki group and the Conway group, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 157 (1971) 189-204.
- [16] Maglovaras, S.S., The subgroup structure of the Higman-Sims group, *Bull. Amer. Math. Soc.*, 77 (1971) 535-539.
- [17] Mitchell, H.H., Determination of the ordinary and modular ternary linear groups, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 12 (1911) 207-242.
- [18] Mitchell, H.H., The subgroups of the quaternary abelian linear groups, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 15 (1914) 379-396.
- [19] Mwene, B., On the subgroups of the group  $PSL_4(2^n)$ , *J. Algebra* 41 (1976) 79-107.
- [20] Petrov, N and Tcheckerian, K., The maximal subgroups of  $O_2(4)$ ,

*J. Algebra* 76, 171-185 (1982)

[21] Suzuki, M., On a class of doubly transitive groups, *Ann. Math.* 75, 105-145 (1962).

[22] Tchakerian, K., The maximal subgroups of the Tits simple group  
*Comptes Rendus de l'Académie Bulgare des sciences* 34, N°12 (1981).

[23] Wilson, R. The Quaternionic lattice for  $2G_2(4)$  and its maximal subgroups, *J. Algebra* 77, 441-466 (1982)

[24] Wilson, R. The Complex Leech lattice and the maximal subgroups of  $Suz$ , to appear in *J. Algebra* (?)

[25] Wilson, R. personal communication

[26] Yoshiwara, S. 散在型鈴木厚純群の極大部分群について  
東大修士論文 1982

[27] Yoshiwara, S. to appear

[28] Yoshiwara, S. to appear